

「からかい」や「いじめ」と比較した「いじり」の特徴

望月 正哉(日本大学文理学部)

澤海 崇文(神奈川大学人間科学部)

瀧澤 純(ノースアジア大学法学部)

吉澤 英里(環太平洋大学次世代教育学部)

近年、若年者を中心とした対人コミュニケーションのなかでいじりという言葉が用いられる場面がある。本研究では、対人行動におけるいじりとはどのような特徴をもつ行動と認識されているのかについて、類似する行動と考えられるからかいかいやいじめとの比較を通じて検討した。初めに自由記述による予備調査を実施し、いじり、からかい、いじめがもつ概念的特徴を見出した。そのうえで、本調査では、第三者の立場から、いじり、からかい、いじめにおいて、それらの概念的特徴がどの程度あてはまるのかを評価させた。その結果、いじりは他の 2 つの行動に比べ、好意や互いが仲良くなりたいといった肯定的な特徴をもちつつ、悪意や受け手をバカにするといった否定的な特徴をもたないと評価されていた。このことから、いじり行動はからかいかいやいじめ行動と比較して、それぞれの意図性などをもとにして異なる特徴をもつと認識されていることが示された。

キーワード: 対人行動、しろうと理論、いじり、からかい、いじめ

問題

いじりという言葉には、指で触れたり動かしたりするといった意味合いに加えて、コミュニケーションの場面で、送り手が受け手を小ばかにしたり、無理をいって困らせるといったような意味合いもある。後者の意味合いをもついじりは、特に「いじられキャラ」といった言葉として用いられることが多く、若年者を中心に広がっていると思われる(堀内・山西, 2014)。この背景には、2000 年代以降にメディアにおいて「素人いじり」という演出が取り上げられるようになったことがあり、笑いの要素と結び付けられて用いられていることも普及に関連していると考えられる(e.g. 朝日新聞, 2000; 兼高, 2001)。しかし、いじりとは具体的にどのような行動であるのか、類似の行動とはどのような関係にあるのかといったことは十分には明らかではない。そこで本研究では、対人行動におけるいじりがどのような行動であると認識されているのかを、関連する行動と考えられるからかいかいやいじめとの比較を通じて検討した。ここではまず、いじりと関連すると考えられるからかいかいやいじめの特徴を概観し、その後これまでいじり研究についてみる。

からかいかいといじめの定義

対人行動の心理学的研究において、いじりに関連すると考えられる概念としてからかいかいといじめが挙げられる。

からかいかいは他者に向けられた攻撃行動・問題行動とされる(遠藤, 2008; 牧, 2008)。からかいかいの際に対象になる具体的な内容として、受け手の容姿、行動、人間関係、趣味などがあり、基本的に否定的なものであるとされる(Endo, 2007)。からかいかいは攻撃行動・問題行動と表現されるが、送り手が遊戯性を含めることで攻撃性や悪意を低く伝えるという特徴もある。また、からかいかいは対話者同

士の心理的な結束が強くなるにしたがって、攻撃的なからかいかいであっても、「自分はあなたをからかえるほど親しみを感じている」という間接的メッセージ(meta-message)を含むため、相手に心地よさを感じさせる機能があるとされる(葉山・櫻井, 2008; Norrick, 1994)¹⁾。これらを総合すると、からかいかい行動は、受け手の怒りを引き出す挑発性を含むとともに、親しみの感情を伝える遊戯性をもった行動だといえる(牧, 2008)。

一方、いじめは「児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人的関係にある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの」と定義される(文部科学省, 2013)。この被害者視点からの定義については議論がされており、小林・三輪(2013)は、学校側がいじめを隠しにくくするといった利点がある一方、いじめの早期発見をしにくいという欠点もあるとしている。このいじめの定義には賛否両論あるものの、総じて受け手に苦痛や不快感情を生じさせるものだと考えられるだろう。

このように二つの行動は、攻撃行動や問題行動という点では共通するが、からかいかいが送り手と受け手の間にある親しみや心地よさという快感情と関連すると捉えられる一方で、いじめは特に受け手の不快感情と強く関連すると考えられる。しかし、両者は完全に別個のものであるわけではなく、互いに関連性をもつともされる。

Kowalski, Howerton, & McKenzie (2001) は、からかいかいとそれに関連する行動との違いについて、ユーモア、両義性、アイデンティティへの直面という 3 側面から分類できるとしている。それによると、ユーモアが高く、両義性が低く、アイデンティティへの直面が中程度のものが向社

会的なからかい、ユーモアと両義性が中程度、アイデンティティへの直面が高いものを残酷なからかい、そしてユーモアと両義性が低く、アイデンティティへの直面が高いものをいじめとしている。類似した分類は台湾における学校でのいじめの定義について検討した Cheng, Chen, Ho, & Cheng (2011) でもみられている。この研究では、いじめに対する考えについて述べた自由記述を、グラウンデッドセオリーアプローチを用いて分類した結果、行動パターンには立場や意図性によって遊戯的なからかい、いじめ、過酷ないじめの3つに分類されるとしている。これらのことから、からかいといじめは異なる行動ではあるが、共通の要素をもっており、その要素を評価することによって区別される可能性を示している。

いじりとからかい、いじめの類似点

先に述べたようにコミュニケーションの場面におけるいじりは日本において広がりつつあると考えられる。このような現象について、社会学的・臨床心理学的な考察はみられるものの (e.g., 本間, 2009; 向井, 2010)、体系的に十分に解明されているものではない。そのなかで瀧澤・望月・澤海・吉澤 (2014) は大学生に対していじりのエピソードと、いじりの捉え方について自由記述で尋ねた。彼らはいじりのエピソードから、いじりは親しい関係のなかで行われ、受け手の身体的特徴や行動に関する言語的な反応、指で突くといった非言語的な反応、無視するといった反応・行動がみられることを見出した。このような特徴はからかいと類似しており、ともに二者関係において身近で取り上げやすい内容を用いた対人行動であると考えられる。さらに、受け手の身体的特徴や行動が取り上げられる点は、いじめられやすい人の特徴 (深谷, 1996) とも類似しており、いじめと類似しているともいえることができる。また、瀧澤他 (2014) では、いじりの捉え方に対する記述の KJ 法によるまとめから、ときに関係を深化させる肯定的な反応だけでなく、関係が悪化するような否定的な反応に繋がることもあると指摘している。Kowalski et al. (2001) はからかいにも関係の深化ないしは悪化という変化があることも指摘しており、この点もからかいとの共通点があるといえるだろう。これらのことから、研究の数は少ないものの、いじりはからかいやいじめと共通の特徴をもつ可能性があると考えられる。

本研究の目的

以上をまとめると、いじりとからかい、そしていじめは、共通の要素をもつ対人行動であることが示唆される。瀧澤他 (2014) の研究は、いじりの特徴を直接的に見出そうと試みられているものの、他の行動と比較したいじりの位置づけは明確になっておらず、いじりが単にからかいやいじめの言い換えである可能性もあるといえる。実際、近年の報道では、いじめと判断される事象においても周

囲の人物や送り手 (加害者) は、からかいやいじりの範疇と認識していたとされるものもある (e.g., 毎日新聞, 2015; 日本経済新聞, 2012)。もしこの考えがあてはまるのであれば、いじりも表現は異なるが、対人的な問題行動であると考えられることもできる。しかし、いじりという別の表現があり、からかいやいじめとは異なる対人行動と認識されているのであれば、それがどのような位置づけにある行動と認識されているのかを明らかにすることは、問題行動として了解のあるいじめとの関連性を明確にし、問題への対処など、対人行動に関する研究の基礎資料として意義のあるものとなるだろう。

そこで本研究では、対人行動におけるいじりがどのように認識されているのかについて、からかいやいじめとの比較から検討した。

通常、からかいやいじめに関する研究を行う際には、その行動において特定の立場に立たせ、実際に起こり得る事象やその影響などを評価させるといったことが有効かもしれない。しかし、上述のように、各行動には一定の共通点があると考えられることから、現時点では明確にいじりであるという行動の例を提示することは難しいと考えられる。そこで、具体的な位置づけが明らかでない現時点においては、人々が対象概念に対しても「しろうと理論 (Furnham, 1992)」を取り上げることで、その特徴の一端を明らかにできると考えた。しろうと理論は、一般的な人がもつ客観的・科学的な知識に基づかない素朴な考えのことを指す。しろうと理論を取り上げることで、人々がもついじりの位置づけだけでなく、どのような意図でその言葉を用いているのかといったことも予測できると考えた。本研究ではまず、自由記述の予備調査でいじり、からかい、いじめを特徴付けると考えられる概念を抽出した。そのうえで、本調査では、予備調査で抽出した概念と先行研究で明らかにされた特徴に関する概念を用いて、いじり、からかい、いじめのそれぞれのラベルに対してこれらの概念をどのように評価しているのかを量的に尋ねた。

方法

参加者と計画

東京都にある A 大学と神奈川県にある B 大学に通う学生 312 名 (女性 204 名、男性 106 名、性別未記入 2 名、18—30 歳) が調査に参加した。調査はこれらの参加者に、いじり、からかい、いじめの各行動について評価を求める 1 要因参加者内計画であった。

質問紙

質問紙の作成にあたり、本調査に参加していない 66 名 (女性 49 名、男性 17 名、19—60 歳) に対し、いじり、からかい、いじめの共通点と相違点に関連する概念を明らかにするために予備調査を実施した。予備調査ではそ

Table 1 予備調査におけるカテゴリ語の出現頻度

カテゴリ	具体例	いじり—からかい		いじり—いじめ		からかい—いじめ	
		共通点	相違点	共通点	相違点	共通点	相違点
悪意	悪意	1	16	1	27	3	27
不快	不愉快・苦痛・嫌	2	13	1	18	4	8
傷	傷・ダメージ・中傷	1	2	1	16	4	14
好意	好意・好き・愛情	0	14	0	16	0	6
快	楽しい・嬉しい・喜び	5	12	1	7	1	4
長期間	長い間・継続して・日常的	0	4	1	2	0	6
暴力	暴力・攻撃	0	0	1	6	0	6
親密	親密な・親しい・仲間	0	6	0	6	0	1
バカ	馬鹿・ばか	1	7	0	0	0	3
短期間	一時的・その場限り	1	3	0	0	0	6
(記述)なし		3	4	13	1	9	1

それぞれ「いじり—からかい」「いじり—いじめ」「からかい—いじめ」という3つの組み合わせをつくり、それぞれの共通点と相違点を自由記述式で回答するように求めた。得られた自由記述文に対し TinyTextMiner v.0.88 (松村・三浦, 2009) を用いて形態素解析を行った。そこから出現頻度が高い名詞、形容詞のうち行動の特徴を説明するカテゴリを設定したうえで、第3著者と第4著者が個別にすべての記述を読み、それぞれの記述が各カテゴリにあてはまるかどうかを判定した。判定において合計10以上出現したカテゴリを特徴的概念のカテゴリ語として採用した (Table 1)^{2) 3)}。この予備調査からは、いじりとからかいにおける「快」や、からかいといじめにおける「不快」「傷」という言葉を共通点と捉える参加者もいたが、全体としては相違点を示す概念として捉えられていたといえる。

本調査では、予備調査において採用した「悪意」「好意」「長期間」「親密」「バカ」「短期間」というカテゴリ語、さらに先行研究を考慮して、質問項目を探索的に23項目作成した。基本的に、送り手でも受け手でもない第三者的立場から評価を行う項目が多かったが、「悪意」と「バカ」については送り手から受け手に対する態度を問う項目、さらに送り手と受け手の周囲にいる人物から受け手に対する態度を問う項目を作成した。また、「親密」に関しては、すでに構築された関係での評価もみるために、送り手と受け手同士の関係性を問う項目に加え、いじられる受け手が送り手や周囲との関係のなかで立ち位置を構築するために積極的に受け手として振る舞う可能性があることから (本間, 2009)、親密に (仲良く) なるとうとするという動機に関する項目も作成した。なお、親密動機については受け手、送り手、周囲の人物それぞれの立場から別の立場に対する態度を問う6項目を作成した。これに加え、先行研究 (小林・三輪, 2013; 瀧澤他, 2014) から、人数、立場、

ストレス解消に関する項目も作成した (具体的な文言は Table 2 を参照)。

質問紙では、作成した各項目を行動の種類にあわせた表現 (e.g. 「いじる側は、いじられる側に悪意をもっている」) になるようにした。以上の各項目を6件法 (非常にあてはまらないを1として、あてはまらない、ややあてはまらない、ややあてはまる、あてはまる、そして非常にあてはまるは6とした) で回答させた。各行動を尋ねる順序をカウンターバランスするために回答順序の異なる6種類の質問紙を作成し、ランダムに配布した。

手続き

2013年12月と2014年1月に実施した。調査者が各条件の質問紙の冊子をランダムに配布したあとに、配布終了時に回答に関する説明を行った。教示ではフェイスシートの内容にしたがって、回答の方法と回答の提出をもって参加承諾を示す旨を伝えた。回答は自己ペースに任せ、15分から30分を要した。

結果

本調査では、同一の参加者が各行動を評価したことから、各項目においていじり、からかい、いじめのいずれか1つ以上に欠損があったデータを分析から除いた。したがって、項目ごとに299–303名のデータを用いた。評価の平均値と標準偏差を Table 2 に示した。これらの各項目に対して1要因参加者内計画分散分析を実施した⁴⁾。なお、分散分析では球面性の仮定が成立しない場合には自由度を Greenhouse-Geisser の Epsilon によって補正した。検定の結果、全項目で5%水準で有意な主効果が見られた。また、Shafferの方法による多重比較を実施した (Table 2 右)。

分散分析の結果から、Cohen (1988) に基づくと、「仲

Table 2 行動ごとの評価の平均値と標準偏差および検定結果

	いじり		からかい		いじめ		分散分析		多重比較 の結果
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F</i>	<i>η</i> ²	
する側は、される側と仲良くなろうとしている	4.15	1.06	3.58	1.11	1.96	0.99	394.46	.44	I>T>B
される側は、する側と仲良くなろうとしている	3.71	1.15	3.16	1.12	2.07	1.12	210.79	.27	I>T>B
これから仲が良くなろうとする人間関係で行われる	3.53	1.21	3.09	1.14	2.16	1.17	136.34	.19	I>T>B
周囲の人は、される側と仲良くなろうとしている	3.60	1.08	3.14	1.12	2.42	1.07	124.02	.17	I>T>B
される側は、周囲の人と仲良くなろうとしている	3.80	1.17	3.26	1.09	2.94	1.37	60.04	.08	I>T>B
する側は、周囲の人と仲良くなろうとしている	4.00	1.13	3.75	1.15	3.41	1.46	24.16	.04	I>T>B
周囲の人は、する側と仲良くなろうとしている	3.64	1.10	3.36	1.13	3.25	1.35	12.14	.02	I>T=B
好意をもって行われる	4.42	1.06	3.56	1.31	1.93	1.15	386.71	.43	I>T>B
する側は、される側に悪意をもっている	2.52	1.06	3.30	1.23	4.62	1.25	285.25	.35	I<T<B
周囲の人は、される側への悪意をもっている	2.40	0.97	2.91	1.13	3.56	1.22	111.46	.15	I<T<B
する側は、される側をバカにしている	3.48	1.28	4.04	1.23	5.17	0.96	200.60	.27	I<T<B
周囲の人は、される側をバカにしている	3.33	1.24	3.58	1.20	4.10	1.19	41.58	.07	I<T<B
直接的に関わらないようにしている第三者がその場にいる	3.70	1.23	3.90	1.34	4.78	1.16	83.83	.12	I<T<B
その場に3名以上いる	4.25	1.16	4.18	1.21	4.66	1.15	19.01	.03	I=T<B
立場が上の人から下の人に対して行われる	4.21	1.30	4.30	1.25	4.79	1.21	32.87	.04	I=T<B
立場が下の人から上の人に対して行われる	2.97	1.26	2.79	1.18	2.51	1.30	14.05	.02	I>T>B
立場が同じくらいの人同士で行われる	4.73	1.07	4.49	1.18	4.36	1.31	12.00	.02	I>T=B
長期的に行われる	3.77	1.42	3.72	1.33	4.95	1.00	108.14	.17	I=T<B
短期的に行われる	4.02	1.27	3.86	1.18	3.52	1.45	13.40	.02	I=T>B
仲が悪い人間関係で行われる	2.51	1.24	3.24	1.32	4.69	1.25	259.24	.34	I<T<B
仲が良い人間関係で行われる	4.85	0.97	4.34	1.03	3.18	1.51	160.11	.25	I>T>B
仲が良くも悪くもない人間関係で行われる	3.20	1.28	3.19	1.32	4.14	1.48	67.29	.10	I=T<B
ストレス解消のために行われる	2.98	1.34	3.66	1.33	4.89	1.02	239.67	.29	I<T<B

注)I = いじり (ijiri)、T = からかい (teasing)、B = いじめ (bullying)。

良くなろうとしている」、「悪意」、「好意」という単語が含まれる項目の効果量が大きかった⁵⁾。このなかでも「親密(仲良くなろうとしている)」や「好意」といった肯定的な内容に関する項目の多重比較の結果からは、いじりであってはまるという評価が高く、次いでからかい、いじめの順であった。一方、「悪意」「バカ」「ストレス」といった否定的な内容の表現を含む項目では、いじりであってはまらないという評価が高く、次いでからかい、いじめの順であった。

人数、立場、期間の項目のなかでも「長期的に行われる」「仲が良くも悪くもない人間関係で行われる」「立場が上の人から下の人に対して行われる」「その場に3名以上いる」「短期的に行われる」といった項目では、多重比較ではいじりとからかいに差がみられないという結果であった。また、これらの項目は「長期的に行われる」という項目以外は、効果量は相対的に小さかった。

考察

本研究では、対人行動におけるいじりがどのように認識されているのかについて、からかいやいじめとの比較から検討した。予備調査などから見出された特徴概念について量的な評価をさせた結果、否定的な表現を含む項目はいじめ、からかい、いじりの順で得点が高く、反対に肯定的な表現を含む項目は、いじり、からかい、いじめの順で得点が高い傾向があることが示された。これらの結果は、第三者の立場からの評価では、いじりはからかいやいじめとは異なる特徴をもつ行動であると認識されていることを示している。

本研究が示す重要な点は二つあると考えられる。一点目は、いじりが相対的に肯定的なものと捉えられている点である。瀧澤他(2014)では、いじりがからかい、いじめと関連する行動と認識されていることが示されてきたが、本研究では、いじりが他の2つの行動よりも肯定的

なものも認識されていることが明確になったといえる。からかいには遊戯性があり、攻撃的な内容であっても受け手に心地よさを感じさせる要素があることが指摘されている(葉山・櫻井, 2008)。本調査ではいじりが、からかいよりも好意や仲良くならうとする意図が高いといった評価がなされていた。本研究では人々のしろうと理論を取り上げ、具体的な行動を対象にはしていない。しかし、問題でも述べたように、メディアにおいて、相手をいじることで笑いが生まれるといった演出が広められた結果、いじりというラベルがつくことで第三者の視点からはその行動が笑いなど肯定的であると考えられる側面と関連する行動と認識され得ることを示唆している。

二点目は、当事者同士の悪意、好意、親密(仲良くならうとしている)といった意図に関する項目で効果量が大きかった点である。本研究では、実際の行動を評価していないものの、いじり、からかい、いじめは第三者から見ると特に当事者同士の意図性が異なると捉えられていることが示唆されたといえる。Kowalski et al. (2001) では、いじめやからかいが、ユーモア、両義性、アイデンティティへの直面といった側面から区別されるとした。しかし、いじりを含めた区別では、当事者の意図性が重要であると評価されていることが示されたといえる。一方で、人数や立場、期間に関する項目は有意な主効果がみられていたものの、効果量は上述の項目よりも相対的に小さかった。したがって、これらの側面は3つの行動を強く特徴づけるものではないと認識されているといえる。「長期的に行われる」「直接的に関わらないようにしている第三者がその場にいる」「立場が上の人から下の人に対して行われる」「その場に3名以上いる」といった項目は、3行動とも回答の理論的中央値である3.5より高かった。これらを考慮すると、3つの行動は、意図性に違いがあるもので、人数や立場、期間という側面については、全体的な方向性としてある程度、共通してあてはまる傾向をもつものと認識されているとも解釈できる。

いじりが他の2つの行動よりも肯定的な評価である、そして特に意図性が各行動で異なると考えられているといった点は、問題で述べた、結果としていじめと判断されるような行動を、送り手や周囲はいじりとして認識していたという認識の差について説明することができる。からかいやいじめの研究からは同一の行動であっても、立場により評価が異なり、送り手の遊戯性の意図は受け手に正確に伝わらない可能性も示唆されている(Cheng et al., 2011; Endo, 2007; Kruger, Gordon, & Kuban, 2006)。これらの研究では、送り手のほうが楽観的・肯定的な評価をする傾向にあることが示されている。また、望月・吉澤・澤海・瀧澤(2015)はいじり行動において送り手と受け手の視点に立たせてそれぞれの感情を評価させたところ

同様の差異があることを見出している。今回の結果が示すように、第三者がいじりという行動を好意や親密性に基づくという認識をもったとしても、受け手は、表面上はいじりだと同意していたとしても、実際の認識はより否定的である可能性があるということに留意する必要があるだろう。

限界と課題

本研究ではいじりはからかいやいじめとは異なるものであると認識されていることを明らかにした。しかし、本研究は行動を表す概念へのしろうと理論を扱った研究であり、実際の行動は対象にしなかった。本研究の結果は実際の行動を対象にする際の起点となると考えられるが、いじり、からかい、いじめを扱う際には、実際の行動やその経験を対象とすることが求められるだろう。擬似的な状況を用いて検討する際には、当事者の意図性や立場を操作したビデオやシナリオを見せ、それに対する評価や介入の必要性の有無を尋ねるといったことが有効だろう。これにより、いじりがからかいやいじめと比べ具体的・顕在的な行動にも違いがあるものであるのか、行動のラベルの付け方だけでも認識に影響を与えるものであるのかといったことを検討することができるだろう。

また、本研究は大学生を対象としたが、他の年代でも同様の解釈なのかどうかは明らかではない。いじめに対する対処が特に必要であろう小学生や中学生、高校生が、これらの行動をどのように認識しているのかについても検討の必要があるだろう。本研究では、対人行動におけるいじりという言葉が2000年以降に多くみられ始めたという背景から、発達過程でその言葉に触れつつ、ある程度客観的な判断ができると考えられる大学生を対象として評価を求めた。しかし、笠井(1998)は小学生・中学生のいじめの認識には差異があること、笠井・木村・永松・中澤・三浦(1996)のデータとの比較から、彼らの認識は大学生のそれとも異なることを示した。いじりが、からかいやいじめと関連をもつ可能性があることから、その対処が必要となるであろう年齢において、認識に差があるかを検討する必要もあるといえるだろう。

さらに、本研究では、いじりという言葉を明示的に用いた点にも留意しなければならない。参加者は、各行動に差異がないと評価することが可能ななかでも差異があると評価したことから、各行動に異なる特徴を見出していると考えられる。しかし、いじりという行動が独立した概念として存在し、自発的に想起され得るものであるのか検討する必要があるだろう。このような問題に対しては、例えば、具体的な行動を観察させたり、行動の記述を読ませたりした後に、その行動がどのような言葉で表されるのかを記述させるといった課題を応用した方法が有効であると考えられる。

引用文献

- 朝日新聞 (2000). 恋のから騒ぎ “素人いじり”アクセル全開 (ばんぐみ探見隊) 朝日新聞, 平成 12 年 4 月 25 日 (夕刊), 10.
- Cheng, Y.-Y., Chen, L.-M., Ho, H.-C., & Cheng, C.-L. (2011). Definitions of school bullying in Taiwan: A comparison of multiple perspectives. *School Psychology International, 32*, 227-243.
- Cohen, J. (1988). *Statistical power analysis for the behavioral sciences 2nd ed.* Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates.
- Endo, Y. (2007). Divisions in subjective construction of teasing incidents: Role and social skill level in the teasing function. *Japanese Psychological Research, 49*, 111-120.
- 遠藤 由美 (2008). からかいの主観的理解——役割と他者への一般的态度の影響—— 関西大学社会学部紀要, 39, 1-16.
- 深谷 和子 (1996). 「いじめ世界」の子どもたち——教室の深淵—— 金子書房
- Furnham, A. F. (1988). *Lay theories: Everyday understandings of problems in the social sciences.* Elmsford: NY, Pergamon Press (ファーンハム, A. F. 田名場 忍・細江 達郎・田中場 美雪(訳) (1992). しろと理論——日常性の社会心理学—— 北大路書房)
- 葉山 大地・櫻井 茂男 (2008). 友人に対する冗談関係の認知が冗談行動へ及ぼす影響 心理学研究, 79, 18-26.
- 本間 知巳 (2009). 「いじられキャラ」となっている子をどう考え、どう支援するか 児童心理, 63, 530-534.
- 堀内 克明・山西 治男 (2014). 若者:「いじられキャラ」清水 均 (編) 現代用語の基礎知識 2014 自由国民社, p.1174.
- 兼高 聖雄 (2001). 「素人いじり」を楽しむ視聴者心理 GALAC, No.45, 32-35.
- 笠井 孝久 (1998). 小学生・中学生の「いじめ」認識 教育心理学研究, 46, 77-85.
- 笠井 孝久・木村 史代・永松 未生・中澤 潤・三浦 香苗 (1996). 小・中学生, 大学生の“いじめ”認識 千葉大学教育学部教育相談研究センター年報, 13, 45-60.
- 小林 英二・三輪 壽二 (2013). いじめ研究の動向——定義といじめ対策の視点をめぐって—— 茨城大学教育実践研究, 32, 163-174.
- Kowalski, R. M., Howerton, E., & McKenzie, R. (2001). Permitted disrespect: Teasing in interpersonal interactions, In R. M. Kowalski (Ed.), *Behaving badly: Aversive behaviors in interpersonal relationships.* (pp.177-202) Washington: American Psychological Association.
- Kruger, J., Gordon, C. L., & Kuban, J. (2006). Intentions in teasing: When “just kidding” just isn’t good enough. *Journal of Personality and Social Psychology, 90*, 412-425.
- 毎日新聞 (2015). 社説 いじめ対策 形ばかりを改めよう 毎日新聞, 平成 27 年 8 月 3 日 (朝刊), 5.
- 牧 亮太 (2008). からかい行動 (teasing) に関する研究の動向と課題 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部, 57, 269-276.
- 松村 真宏・三浦 麻子 (2009). 人文・社会科学のためのテキストマイニング 誠信書房
- 向井 学 (2010). 「いじめの社会理論」の射程と変容するコミュニケーション KG/GP 社会学批評, No.3, 3-10.
- 望月 正哉・吉澤 英里・澤海 崇文・瀧澤 純 (2015). “いじられる”人はポジティブな感情を抱いている? ——いじり・からかい・いじめによって生起される感情の比較—— 日本心理学会第 79 回大会発表論文集 112.
- 文部科学省 (2013). いじめ防止対策推進法の公布について (通知) 文部科学省 Retrieved from http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1337219.htm (平成 28 年 11 月 1 日)
- 日本経済新聞 (2012). いじめ問題で全校集会 兵庫の高 2 自殺, 校長が生徒に謝罪 日本経済新聞, 平成 24 年 9 月 18 日 (夕刊), 17.
- Norricks, N. R. (1994). Involvement and joking in conversation. *Journal of Pragmatics, 22*, 409-430.
- 瀧澤 純・望月 正哉・澤海 崇文・吉澤 英里 (2014). いじりコミュニケーションを構成するフローについての質的検討と場を構成する人数, 関係性についての量的検討 第 33 回社会言語科学会研究大会発表論文集, 64-67.
- 吉澤 英里・瀧澤 純・望月 正哉・澤海 崇文 (2013). いじり・からかい・いじめの差異について——自由記述データの分析に基づく考察—— 日本教育心理学会第 55 回総会発表論文集, 178.

註

- 1) ただし葉山・櫻井 (2008) ではこれらの行動について冗談という言葉を用いていた。しかし、内容的にはからかいとほぼ同義であると判断し、ここではからかいのまま表現した。
- 2) 予備調査の詳細については吉澤・瀧澤・望月・澤海 (2013) を参照されたい。見出されたカテゴリの内、「不快」、「快」、「傷」、「暴力」に関する内容は、当事者の感情に関連する項目であるため本調査には含めなかった。これらの項目を用いた調査は望月他 (2015) を参照されたい。
- 3) 頻度の算出において、1 名の参加者の一つの記述のなかに同じ単語が複数個含まれていた場合でも頻度は 1 とカウントした。一方で、一つの記述の中で複数カテゴリへの言及があった場合には、それぞれのカテゴリに 1 ずつカウントをした。加えて、カテゴリとした概念以外の記述をした参加者もいたため、頻度と参加者の数は一致しない。
- 4) これらの結果に対して、因子分析等を実施し、関連する項目やその背景にある因子を見出し、解釈することが有効であるとも考えられる。しかし、いじり、からかい、いじめの全ての項目を用いた探索的因子分析では、解釈可能な因子は見出されなかった。したがって、本論文では、項目ごとに分散分析を実施する方法を採用した。このような結果は、因子分析によって、評価の背景を明らかにしようという観点に立つて項目を作成しなかったためであるとも考えられる。
- 5) Cohen (1988) では、 $\eta^2 > .14$ を効果量大、 $\eta^2 > .06$ を効果量中、 $\eta^2 > .01$ を効果量小としている。

Characteristics of *ijiri* as compared with teasing and bullying

Masaya MOCHIZUKI (*College of Humanities and Sciences, Nihon University*)

Takafumi SAWAUMI (*Faculty of Human Sciences, Kanagawa University*)

Jun TAKIZAWA (*Faculty of Law, North Asia University*)

Eri YOSHIZAWA (*Faculty of Education for Future Generations, International Pacific University*)

In recent years, some forms of interpersonal communication among the youth are labeled as "ijiri". The current paper investigates what characteristics ijiri is perceived to have, in comparison with similar types of behavior, teasing and bullying. We identified conceptual characteristics of each behavior in an open-ended preliminary survey. In a following study, we asked participants to rate to what degree each feature would characterize each of the three kinds of behavior while taking an observer's perspective. Results revealed that ijiri was perceived to be different from teasing and bullying based primarily on intention of the behavior: ijiri was perceived to carry more positive features such as the provider's and receiver's mutual intention to get closer to each other while less holding negative characteristics such as malicious and contemptuous attitudes toward the receiver.

Keywords: Interpersonal behavior, Lay theories, *Ijiri*, Teasing, Bullying